九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

今井源衛著『紫式部』

西丸，妙子

https://doi.org/10.15017/12242

出版情報：語文研究. 24, pp.54-55, 1967-10-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

今井源衛著『紫式部』

西丸妙子

本書の目次は左の通りである。

一、その時代　二、家系　三、生い立ち　四、青春・未婚時代　五、結婚生活　六、寡居時代　七、『源氏物語』の起筆　八、宮仕え生活　九、『源氏物語』の展開と『紫式部日記』　十、晩年　十一、人としての紫式部　十二、女性観・教育観　十三、『源氏物語』の享受と紫式部観の変遷

本書は「人物叢書」の一冊として書かれたものであり、初学の者にも興味深く、しかもわかり易くという配慮がなされている。内容は〝紫式部のすべて〟であって、すでに御発表になった著者の教多くの学術論文を骨格とされ、さらに『紫式部日記』と『紫式部集』の鋭い洞察による式部の内面把握、また、式部については現在これ以上は見出せないであろうと思われる程丹念に集められた、百を越す資料により実証・裏付けがなされている。それらによって再構成された式部の姿は、背景となる家庭や社会の多角的記述とも相まって、千年の昔の人とも思えない程鮮明なものである。以下、著者のユニークな御考察のほんの一端を紹介させていただく。（数字は目次の番号による。）

二、においては、父方母方共に文人、歌人として名を知られる者は多いが、ことに式部の父為時の祖父で、文事風流に一世を風靡した中納言兼輔の存在は、一族の人々の意識に、家門に対する誇りを抱かせるもととなっていたのではないか。また式部の伯父で、歌に秀で、物語好きの為頼の存在は、式部が『源氏物語』を書くことができた一つの要素として無視できない。またこれら一族の人々の歌や体験のいくつかは物語中に生かされていることものべられる。

三、出生は天禄元年とされ、「これは従来の通説よりは八年、岡一男氏の説より三年出生をくりあげることとな」っている。その根拠の一つは、通説の基礎となっていた『紫家七論』についての誤解を正されることにより、二には、日記中に見える年齢に関係ある記事についての検討をされ、特に、三には、日記中の今まで難解であった個所の一つに「めくらうて」の本文を善本によって選ばれ、それは老眼になることだとして、その年令を医学上より証明されたことによる。

四、では、二十三才ごろに式部にも恋愛の体験があるだろう。その後、父と共に越前へ下ったのは、式部にとって都に居づらい思いをさせること、即ち、後の夫宣孝との交渉が縺れていたのではないかと考えられている。四―五辺りではことに今まで朦朧としていた式部の若き日の姿を生き生きと知ることができる。これ程はっきりと言えるものだろうかという懸念をもたれる方もあるかもしれないが、家集の歌についての深く確実な著

者の解釈は、十分に客観性を持つ資料たりえよう。なお、ほとんどの歌の口訳が付されているのも読者にとってはありがたい

六、三年足らずの結婚生活で寡婦となった式部は、不幸にめげず強靱に生き抜いてゆくのだが、その頃には、人間を「身と心という二元的存在と見、両者の相関関係の中に自分の具体的姿を見出し」ており、「知的客観的な人間把握」がしっかりとなされるような人であったと彼女の心理を掘り下げられる。

七、式部が書を読むだけには飽き足りず、自ら物語を創作しょうとした動機は、「式部の生命力が夫の死を機として凍結の危機にさらされることによって、猛然とそれを拒み、彼女をして積極的にみずから生きようと決意し、それを実行させたところにこそ在るのではなかろうか」といわれ、やがて現実社会や己れの心情を自由に綴れる物語を書くことを心の支えとして生きてゆくことになる。

八、式部が宮仕えをする数年前より、栄華の極みにあった道長は文事に心をいれるようになり、中でも書物の蒐集を盛んにやり出した。殊に寛弘二年ごろ大規模な集書を思い立ったらしいが、式部の出仕が求められたのは、その準備のためと、さらには彼女の才能のすばらしさや、物語を書いていることなどもすでに知られていたとすれば、中宮彰子や妍子にとっても役に立つ人物であると考えられたことにより、みずからは宮仕えを望まなかった式部も、ついに寛弘二年末出仕させられた。しかしまもなく退出し、一時家に居たのは、式部には宮仕えする前後に愛人があり、そのことが原因しているのではなかろうかといった種々の新しい考察が展開されている。

十、式部の名が文献に見える最後のものは、実資の『小右記』の長和二年五月二十五日であるが、実資はそれ以前から彰子への用件の取り次ぎを式部に頼んでいたらしい。しかし、道長と娘彰子との仲が悪くなると、式部は道長によって取り次ぎ役を免ぜられたのではないか、そうしてこれを期に長和二年十月初めごろまでに宮仕えをやめたのであろうとされたのも著者の新説である。またその面から、古来式部は道長の妾ではなかったかという説があったのを否定され、道長に対して批判・対抗者であった実資に深い信用を受けていた式部であれば、道長との情交は考えられないという証拠を示された。

十一、では、幸薄く、人から愛されることの乏しかった生活が、式部の矛盾とも見える複雑な心理を作り出し、愛の渇きを満たそうとして書いた『源氏物語』には、女らしい愛の心が披瀝され、一方、日記には冷ややかな仮借ない人間観察の記述としてあらわれてきているのであろうと述べられている。

なお巻末には関係諸系図、略年譜、主要参考文献が添えられているが、ことに式部に関する年譜は初めて著者によって作られたものであるだけに、本書の内容を著者がいかに確信を持って世に問われたものであるかということがうかがえよう。

以上、頁数の都合もあり、あまりにも僅かな部分しか述べられなくて残念であるが、それにもまして、今井先生の日頃のお導きにもかかわらず不勉強の私には、本書の学問上の真価の多くを見落していることと思う。深くお詫び申しあげる。

（昭和四十一年三月、吉川弘文館刊、三六〇円）